

深求・川にちなんだ万葉集の歌

万葉の川心 第8回

船田 園子

下総国の歌〈東歌〉

下毛野安蘇の河原よ

石踏まず空ゆと來ぬよ汝が心告れ

(巻第一四 三四二五)

「どうして河原に來たのだろう。空ならどこでも見れるというのに。」

草の海に飛び込んだまま もう秋に近いこの空を飽かず眺めている

都会の喧騒も疲れた心も 視界に広がる一面の青空に吸い込まれていく

鳥が流れ 雲が流れ 風が流れる

宙に浮かんだ心も流れる

つれづれの物思いは

遮るものない空に

尽きることなくあふれ出る

青空のせつなさに思わず身を起こすと

川は静かに地を抱いて流れていた

通りすぎるレガッタを見送って

また静かに空を見上げた

「安蘇の川」は、栃木県安蘇郡葛生町から田沼町、佐野市へ南流して渡

良瀬川に合流する秋山川のことである。君を想い「河原の石を踏んだおぼ

えがないほど」に「空を飛んできた」という。ほほえみが涙になるような

瞬間を、それは美しく表現している。

「下野の安蘇の河原の石の原、踏んだ気もせず、宙を飛ぶ想いで來たの

詠まれたこの歌は、説明の言葉がなくしてしまいう程に真っ直ぐで純朴で、詠んだ心と歌をもらう心が一時に胸に迫ってきて、せつない。

安蘇の名は「麻」に由来していると言われ、もう一首次の歌が詠まれている。

上毛野安蘇の眞麻群かき抱き寝れど飽かぬを何どか吾がせむ

「かき抱いて寝てもまだ満ち足りた心地がしない。ああ私はどうしたらいいのだろう。」「あ」や「ぬ」の音によって、もどかしさが耳からも心に響いてくるこの歌は、麻の匂いの込める初秋の畑で、丈の高い麻を抱くようにして刈り取る姿を、恋しい人をいさぐ姿に重ね合わせて詠まれている。労働が恋歌へと導かれ、東歌ならではの素朴さと暖かさが直截に伝わってくる。本来安蘇が下毛野なのか上毛野なのかは定かでないが、安蘇と呼ばれたこの辺りは麻の栽培地であり、この二首は、そこで働く人々に深く愛されたことだろう。

まわりのすべてが流れていると感じたとき

立ち上がった

土手に止めてあった自転車に乗り

そしてゆっくと流れ出した



葛生町を流れる秋山川